



TITLE:

カレツキの開発経済学(2)

AUTHOR(S):

山本, 英司

CITATION:

山本, 英司. カレツキの開発経済学(2). 経済論叢 2000, 165(3): 68-82

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/45340>

RIGHT:

經濟論叢

第 165 卷 第 3 号

-
- Java 仮想マシンの高速化の可能性 中 島 康 彦 1
- リスクをとまなう社会での協力の進化的形成 藤 山 英 樹 29
- 自社の株式を対象とした売建
プット・オプション取引における
会計問題 (2) 池 田 幸 典 47
- カレツキの開発経済学 (2) 山 本 英 司 68
- 現代欧州重電市場の構造変化と企業再編 岸 田 未 来 83

学 会 記 事

平成12年 3 月

京 都 大 学 経 済 学 会

カレツキの開発経済学（2）

山 本 英 司

V カレツキ開発経済学における倫理

カレツキが提唱する開発のための最重要の処方箋は食糧供給の増大である。カレツキは重工業化による「追い付け，追い越せ」型の華々しい経済開発を提唱することはなかった。その点，極めて地味とも言えるが，何ゆえカレツキはそのような主張をしたのであろうか。

高成長を目的とするならば工業化が目指される。より急速な工業化のためには重工業化が必要とされる。しかしながら，カレツキにあっては農業部門が最重要視されるのである。カレツキが目指したのは，いたずらな高成長ではなく民衆の生活水準の向上であった。そのためには，食糧供給を増大し，失業を除去することが先決である。それがために，逆説的ではあるが，高成長は排除されるのである。

また，農業における技術選択に関してカレツキは，少なくとも開発の初期においては，単位面積あたりの生産性を上昇させる技術を採用すべきであって，それなくして単位労働者あたりの生産性を上昇させる技術を採用してはならないと主張している（Kalecki [1960b]）。食糧供給の増大につながらず，失業ないし不完全雇用を増大させる恐れがあるからである。ちなみに，望ましい技術としてカレツキは，小規模な灌漑，肥料の適切な利用，二毛作，化学肥料の適用，品種改良を挙げている（Kalecki [1960b]）。そしてこれらの手段が零細な農民にも利用できるよう，政府が適切な政策をとるよう提言している（Kalecki [1960a]）。

工業部門においてはどうかであろうか。カレッキが何よりも恐れたのはインフレーションであった。これまで述べたように、都市への食糧供給が一定のもとで経済成長がなされるとインフレーションと実質賃金率の低下が発生する。しかしながら、たとえ農村に残存する農民が1人あたり食糧消費を増大させず都市への労働力移動に応じて都市への食糧供給がなされたとしてもインフレーションは起こり得るとカレッキは指摘している(Kalecki [1960b])。なぜならば、都市への労働力移動が生じるのは農村に留まるよりも高い消費水準をもたらすであろう名目賃金が提示されるからであるので、名目需要は増大する。したがって、1人あたり食糧供給に顕著な増大が見られないかぎり、ともかくも物価上昇は生じるからである¹⁾。

インフレーションに対する警戒心は、カレッキが国際連合に勤めていた時からのものであった。国連職員のデル(Sidney Dell)が紹介するところによると、1953年4月付の国連資料でカレッキは、「インフレーションによるこれらの最初の影響は、インフレーションを累積的にするだけでなく、まさにインフレーションがもともと引き起こされたところの発展過程を挫いてしまうかも知れない」(Dell [1977], p. 41)と述べている。「カレッキは低開発国におけるインフレーションを決して軽くみなさなかった。彼はいかなる機会においても、例えば、インフレーションは強制貯蓄をもたらすための手段として必要悪であろうなどと論じたことはなかった。対照的に彼が強調したことは、持続的なインフレーションが商品の私蔵や資本逃避、通貨投機、投資パターンの歪みへの誘因をもたらすことであった」(Dell [1977], p. 41)。

カレッキによると、こうしたインフレーションに対しては財政・金融のマクロ的手段による緊縮政策は有効でなく、仮に有効であるとすれば、それは発展そのものを停止させることによってである。しかし、カレッキが求めていたのは、発展の果実を最も貧しい部分に及ぼすための開発政策なのである(Dell

1) ここでカレッキは明示的に記してはいないが、資本主義経済の分析においてカレッキが貨幣供給の内生説を主張していることが想起される。

[1977], p. 41)。

カレッキは、Kalecki [1960a] と Kalecki [1970b] のそれぞれの冒頭において、1. 必需品価格にインフレーションがあってはならない、2. 必需品や低所得者に追加的な課税をしてはならない、という経済発展にあたっての仮定 (assumption) を繰り返している。まさにこれらはカレッキにとって、発展途上国における経済政策を考えるにあたっての前提であったのである。

VI 資本輸入・外国援助の評価

既に述べたように、輸入は経済成長のボトルネックを緩和するための1つの手段である。しかし、産油国等を除く一般の発展途上国においては国際収支問題が発生する。そこで、外国援助を含む資本輸入が期待されるところとなる。この問題に関しては Kalecki [1954a] において既に論じられているが、サッフス (Ignacy Sachs) との共著である Kalecki & Sachs [1966] において体系的に論じられているので、以下、それによることとする。

まず、援助とはそもそも何か、どのように評価されるべきかが論じられる。供与国の側からは、2つの場合が考えられる。第1は、供与国自身の生産能力に余裕がない場合である。これは社会主義国による場合が多いのであるが、この場合、援助は自己犠牲の発露である。第2は、供与国自身の生産能力に余裕がある場合である。これは発達した資本主義国による場合が多いのであるが、これは供与国経済にとって投資と同じ乗数効果をもたらし、完全雇用の達成など供与国自身の経済の改善に資することになる。ともあれ、外国援助とは、成長の外的条件の改善を意味するものであり、その評価にあたっては受け入れ国の経済発展にもたらす全般的な効果を見なければならないとカレッキは指摘する。国際収支をどの程度改善したか、それは何に支出されたか。また成長率をどの程度引き上げ、何が新しく生産されたのか。カレッキは、必需品もしくは社会保障の増大またはそれらのための投資の増大がもたらされる場合に援助は利用されてよいと述べる。また、援助の受け入れ能力に触れて、債務は返済さ

れねばならないことに注意を促し、物資の輸入に留まらず経済発展には人的資源が必要であるとして技術支援や人的資源への投資の必要性を説く。

続いて、具体的な援助形態について、無償援助、借款、穀物借款、外国直接投資、貿易を通じた援助の順に検討される。

無償援助について。これは純経済学的には最も望ましいものである。しかし、それであるがゆえに、政治的なコストが高くつくことに注意しなければならないとカレッツキは警告する。

借款について。これには元金返済を含めた利払い負担が問題となる。また、援助とは、借款供与額そのものではなく、商業ベースの借款と較べての利払い負担の軽減の度合いであるとの指摘は興味深い。その上で、政治的なひもつきが少ないとして、商業ベースの借款が望ましいとする。むしろ重要なのは支払い方法である。カレッツキは、④ 交換可能通貨（ハードカレンシー）での支払い、⑤ 受け入れ国現地通貨での支払い、⑥ 商品での支払い、の3類型を挙げる。それぞれに対する評価であるが、④は国際市場での輸出増または輸入減を必要とし、貿易問題の解決を延期するのみであるとする。⑤は④よりよさそうであるが、まずハードカレンシーでも輸出可能な財が現地通貨を用いて援助国によって輸入されることを考えると、結局同じことである。⑥は、借款によって輸入された資本財で生産された商品を輸出することになればそれが相互の利益にもなり最もよいと言う。

穀物借款について。これはアメリカ合衆国に特有のものであるが、合衆国国内での農業保護の結果生じる過剰農産物を援助に用いようというものである。これは受け入れ国の農業に悪影響を与えるものであるとカレッツキは評価する。

外国直接投資について。そもそもこれは援助なのかとカレッツキは疑問を發する。私企業の利潤動機に基づいて投資対象が選ばれ、かつ本国への利益送金がなされることも考慮に入るとこれは援助とは言えないとカレッツキは評価する。その上で、直接投資を利用する際の注意点として、⑦ 対象の免許による割り当て、⑧ 現地企業と同様の税制、⑨ 本国への送金の制限、⑩ 利益の再投資

は資本輸入ではなく国内民間資本とみなす、といったことを挙げ、これらの措置により直接投資が減少しても構わないとしている。

貿易を通じた援助について。先の借款についての検討とも重なるが、問題は輸出能力の拡大であり、実現問題の解決である。こうした観点から、カレッキは最も望ましい援助形態として貿易を通じた援助を提案する。具体的には安定価格での長期輸出契約と UNCTAD を引用しての産業部門間協定を挙げている²⁾。

VII 発展途上国の政治経済学——中間体制論——

発展途上国の経済開発において、政府は重要な役割を果たすことが期待される。

繰り返し述べたとおり、発展途上国の経済開発にあたってはインフレーションが避けられねばならない。カレッキは、そのための条件として Kalecki [1960a] において以下の定式化を行っている。

- (a) 必需品供給が与えられた国民所得水準と適切な関係にある。
- (b) 非必需品への支出が、民間及び公共投資をまかなうために適切な貯蓄をこの国民所得水準から生み出せるよう、十分に制限される。
- (c) 民間投資が、政府投資をまかなうための適切な余地を民間貯蓄に残すよう、十分に制限される。

カレッキによると、いったんこれらの条件が満たされると、政府証券の直接購入か中央銀行を含む銀行制度の仲介を通して、民間部門から政府部門へと必要な資金が流れていく。

2) Kalecki & Sachs [1966] はむしろ、1964年の第1回国連貿易開発会議 (United Nations Conference on Trade and Development, UNCTAD) の後に発表されたものであるが、貿易を通じた援助については Kalecki [1954a] においても簡単に触れられている。カレッキをラテンアメリカにおける構造主義アプローチの源流の1つと見なす見解については Arndt [1985]、カレッキと UNCTAD との関係については Osiatyński [1993], pp. 194-195, を参照のこと。

カレッキは次のように述べている。「確かに、経済発展においてインフレーション圧力を避ける問題は「金融的」ではないのである。それは、さまざまな手段による正しい国民支出構造を保証することによって解決されるのである」(Kalecki [1960a])。

こうした処方箋を提示しつつも、カレッキはその実行可能性には悲観的である。カレッキは、文字通りの意味において政治経済学者であった。「いかなる時においても、カレッキは純粋経済学と言われるかもしれないものに耽ることはなかった」(Sachs [1977], p. 55)。

カレッキは、Kalecki [1966a] において、発展途上国の経済発展にとっての障害を以下の3つにまとめている。第1に、民間投資が望ましい水準にもたらされるか、第2に、資本財を生産する物理的な能力が存在するか、第3に、必需品の適切な供給が得られるか。これらの障害に対してはそれぞれ「純粋経済学」による処方箋が提出される。

しかし、カレッキによると、政治的な障害が存在する³⁾。第1に、開発のための政府計画そのものに対する反対がある。政府の経済への介入を嫌うのである。第2に、必需品の供給増加に関して、これは長期的には農地の封建的・半封建的な所有によって妨げられる。第3に、開発の原資としての裕福な者への課税への反対もしくは脱税がなされる。

カレッキによると、ほとんどの人々は改革の必要性を承認する。しかし、その実行段階になると、既得権を奪われる支配階級は猛烈に反対する。「実際のところ、以上に列挙された経済発展への障害を全て取り除くには、18世紀のフランス革命よりも大きな社会的大変動に達する。したがって、これらの改革が平和的に遂行されないのは驚くにあたらない」(Kalecki [1966a], in English [1993], p. 19)。

ところで、歴史の示すところとして、第2次世界大戦後の植民地解放の中で、

3) 「純粋経済学」によっては理論的に解決可能であっても政治経済学的な考察によってそれが困難であることについては、資本主義経済についての Kalecki [1943] を想起させる。

少なくともスローガンとしては進歩的な、時には社会主義的ですからある政策を掲げる国々が出現した。これらの現象をどうとらえるべきであろうか。そのための分析装置として、カレツキは中間体制 (intermediate regimes) という概念装置を提出している。これは、発展途上国における中産階級 (lower-middle-class) と富農 (rich peasantry) が支配階級の役割を果たす体制である⁴⁾。これまでの歴史の示すところによると、これらの階級が権力の座に押し上げられても、結局は大企業 (しばしば封建制度の残存物と同盟する) の利益に奉仕することになる。しかし、第2次世界大戦後においては、これらの階級の利益を代表する政府が発展途上国において可能なのである。

その条件は、1. 独立達成時において中産階級は極めて多数であり、一方、大企業は外国の支配の下にあり、民族資本の参加は小さい。2. 政府の経済活動パターンは今や極めて広範囲であることが国際的に当然のこととなっている。3. 資本主義国・社会主義国の双方より外資獲得が可能となっている。以上である (Kalecki [1966b], in English [1993], p. 6)。

中産階級は、独立達成時において、他に有力な階級が存在しないため、ごく自然にその代表者を政府に送りうる。彼らが権力の座にあり続けるためには、1. 政治的のみならず経済的な独立の達成、2. 土地改革の遂行、3. 持続的な経済成長、が必要である (Kalecki [1966b], in English [1993], pp. 6-7)。これらの過程において国内の上流階級 (upper-middle-class) の力に頼ることは、結局は大企業の利益への中産階級の従属をもたらすが、そもそも国内の上流階級は頼みとしえないほど弱く、よって経済発展のための基本投資は国家により、中産階級と国家資本主義との共同利益のためになされる。これに対する妨害として帝国主義諸国の圧力——援助に適当な「ひも」を付けることによって——

4) middle-class の前に lower が付いており、rich に続く言葉として farmer ではなく peasantry という言葉があげられているのは、一見すると奇妙である。しかし、カレツキが「なるほど、lower-middle-class や prosperous peasants は本当に豊かなわけではない。多くの場合、彼らの生活水準は発達した諸国での労働者のものより低い」(Kalecki [1966b], in English [1993], p. 10) と書いているところより、lower や peasantry という言葉は国際的な相対関係からの言葉であると思われる。

が考えられる。しかし、社会主義諸国の存在とそれらからの援助の可能性により、より有利な条件で援助を得ることが可能である。

この体制は、中産階級・富農に有利なものである。国家資本主義による投資は中小企業への脅威とはならず、またこれらの階級の若者に雇用機会を提供し、農民革命を伴わない土地改革は貧農を直接搾取する金貸し・商人の地位を維持し、富農は利益を得る。

この体制への上からの敵対者としては、封建的土地所有者及び外資と結び付いた大企業が存在する。前者については、土地改革によりその政治的地位は徐々に奪われる。後者については、その扱いはイデオロギーによるよりも力関係による⁵⁾。

この体制への下からの敵対者としては、農村及び都市における貧困層が存在する⁶⁾。彼らはこの社会体制及びその下での経済発展から得るところはほとんどない。土地改革の利益は富農・中農に集中し、小農・農村プロレタリアートには行き渡らず、彼らは金貸し・商人の支配のもとにある。これにより農業生産の増加が制限され、食料不足・価格上昇をもたらし、都市貧困層を直撃する。しかし彼らは、ここしばらくは体制への脅威となり得ない。農村にあっては、小ブルジョアジー(商人・金貸し)・富農・小土地所有者の寡頭支配の下に置かれ、都市にあっては、失業の脅威にされされ、組織化が難しい⁷⁾。そして、彼らの利益を代表するものとしての共産主義者に対する抑圧が中間体制にあっては容易に見出されるとする⁸⁾。

5) ここでカレツキは、ネルーの方がナセルよりも社会主義的と見なされるが、独立達成時に於いてエジプトよりインドの方が大企業の力が強かったことを挙げている(Kalecki [1966b], in English [1993], p. 9)。

6) カレツキは彼らをこの体制の「養子」と呼んでいる(Kalecki [1966b], in English [1993], p. 9)。

7) 組織化が比較的容易であろうホワイト・カラー労働者や大企業労働者について、彼らは支配階級と同盟を結ぶとカレツキは述べている(Kalecki [1966b], in English [1993], p. 8)。

8) この点でむしろ例外的であったのが、1965年9月30日以前のインドネシアであった。Kalecki [1966b]はKalecki [1964]の増補版であり、そこではじめてインドネシアについて言及されたが、カレツキによると、1964年末当時においてインドネシアは中間体制と矛盾はしなかったがその代表的な例とは言えなかった。その理由としてカレツキは4点を挙げているが、その中に、ノ

以上のような社会体制を有する中間体制に利害関係を持つ中産階級は、国際社会において、その補完物を資本主義・社会主義の2つの陣営の間の中立に見出す。つまり、非同盟である。「中間体制は2つの乳牛の乳を吸う、ことわざで言う賢い子牛である。それぞれの陣営は、相互に競争しながら彼らに金融的援助を与える」(Kalecki [1966b], in English [1993], p. 10)。これにより食糧輸入が可能となり、そのことにより貧民は極端に走らないようになる。こうしたことにより、国内支配体制が再生産される。

お わ り に

サッフスは次のように記している。「カレッキが行った所はどこでも、彼の人格は長く印象を残した。彼は僅か3ヶ月間インドに滞在したのみであったが、彼は未だにそこでよく記憶されている。ボンベイ大学の教師や学生達は、私が1976年に講演したときに、私の論文の発表を短くしてその代わりにカレッキの低開発経済の研究への貢献について話すよう求めた。メキシコやブラジルでは、未だに人々は何年も前に行われたセミナーへの彼の参加に言及して、彼の忘れ難い機知に満ちた言葉を引用している」(Sachs [1977], p. 47)。

カレッキの開発経済学は、現在ではほとんど無名である。しかしながら、少なからぬ人々に大きな感銘を与えてきた。

第I節で見たように、カレッキはいくつかの国に招かれて経済開発にあたっ

、他の中間体制諸国よりも反帝国主義・反植民地主義の主張が強く見られ、また、他の中間体制諸国と異なり強大な共産党が存在していたことが挙げられている。だが、戦前のドイツにおいて、ナチスが国会に放火し、それを共産党の仕業として弾圧を行ったことと同じ役割を果たしたとカレッキが見なす1965年9月30日の事態を境に、反共テロにより40万人が虐殺されて共産党は壊滅し、むしろ中間体制として「正常」になったとしている(Kalecki [1966b], in English [1993], pp. 11-12)。

また、クラ(Marcin Kula)との共著であるKalecki & Kula [1970]においても、1952年のパス・エステンソーロ(Paz Estenssoro)の指導による革命を通じてボリビアは中間体制に入ったとした上で、1964年のバリェントス(Barrientos)将軍のもとでの軍事評議会(military junta)による反革命について、これは中間体制の道を外れたとの印象を与えるかも知れないが、むしろ初期の「革命政府」こそ不自然であり、右への反革命こそ中間体制にとって「正常化」であるとしている。

ての具体的な提言を行っているが、それらの提言はほとんど受け入れられることはなかった。それは、カレッツキの提言する内容が余りに地味で控えめに思われたからである。例えば、Kalecki [1951] において、イスラエルに対して、輸入と政府支出を節約し失業の削減にもなるとして、3階建の鉄骨鉄筋コンクリートに代えて白前のレンガ造りの住宅建設を真面目に提案するあたりはむしろ過激とも言えよう。開発計画の受け入れ国は、もっと派手できらびやかなものを望んでいた。Kalecki [1960c] に触れてイエレイン (B. Jelen) は、「彼の第1次5ヶ年計画の概要はキューバ人が見たかったキューバのためのものではなく、カレッツキが見出したキューバのためのものであった」(Osiatyński [1993], p. 227) と述べている。

しかしながら、少数の例外を除いて発展途上国の経済開発の試みの多くは挫折に終わった。その多くはカレッツキ理論の妥当性をはからずしも実証しているように思える。第Ⅱ節において現実存在する(した)社会主義諸国はむしろ発展途上国として把握されるべきであると指摘したが、食糧供給の重要性、過度の重工業化のための外資依存の危険性は、皮肉なことにカレッツキの母国ポーランドにおいて十全に実証された。

一方、少数の例外の代表である NIEs 諸国の事例は一見、カレッツキの開発処方箋の時代遅れを示したかに見える。しかしカレッツキが目指したのは、少数の特権階級ないし発達した国々が繁栄を享受するのではなく、全ての人々が必需品需要を満たせる社会であった。その先の社会も構想したであろうが、まずはそれが基本であった。この点、人口爆発と資源・環境問題が叫ばれる現代において、カレッツキが目指した社会はむしろ現実味のある理想ではないだろうか⁹⁾。また、1997年からのアジア通貨・経済危機は、第Ⅵ節で示した外資への過度の依存を戒めるカレッツキの危惧を実証したものとも言えよう。

ところで、第Ⅱ節でも示したとおり、カレッツキは途上国経済における資本不足と発達した資本主義経済における資本過剰を対比して論じている。これは現

9) 環境問題とカレッツキとの関係については McFarlane [1996] においても指摘されている。

状況認識としてはその通りであろうが、やや物足りないものを筆者は感じる。そもそもなぜ、発展途上国においては資本が不足しているのか、逆に発達した資本主義経済においては過剰な資本設備を抱え込んでいるのか。これは単なる「発展段階」の前後関係の問題なのか、それともそのような見かけ上の「前後関係」を再生産する何らかのメカニズムが存在するのか。新従属理論にあっては、発達した資本主義の存在のゆえに低開発が存在するとされる。しかし、カレツキは、声高に帝国主義を告発することはしない。カレツキの処方箋はあくまで既存の秩序内での具体的な経済改革に注がれる。新従属理論の副産物として、対外的には帝国主義批判を唱えながらそれを免罪符として対内的には旧来の支配構造を温存していく姿が見られるが、これも声高ではないにせよ、静かな怒りを内に秘めながら、カレツキは「中間体制」を論じた。

カレツキは経済開発にあたって政府の役割を重視し、直接統制を支持したが、それはスローガンとしての抽象的な計画経済の導入ではなく、先行条件に立脚した上での極めて具体的な方策を伴っての提言であった。その点においてカレツキの開発経済学は見事な内実を伴っている。

しかしながら、それが逆に、カレツキ開発経済学の限界を示しているとも考えられる。確かにカレツキのずば抜けた頭脳をもってすれば確な計画を処方できるであろう。しかし、カレツキのような頭脳が必ずしも常に得られるわけではない。そして、事実カレツキが母国ポーランドの経済運営から外されたように、そして発展途上国における助言が採用されなかったように、そのような頭脳が必ずしも計画のラインに組み込まれるとは限らない。むしろ大衆的には不人気な政策を含むため、その実行には賢明な指導者によるある種の独裁が必要となるのではないか。したがって、カレツキに対してはケインズと同様、いわゆる「ハーベイ・ロードの前提」との批判を寄せることが可能であろう。確かにカレツキは素晴らしい計画案を作成した。しかし、それはカレツキ以外の者にも作成可能でなければならないし、実際に採用されねばならない。その点、システムとしての自律性において、カレツキの構想は市場経済のしたたかさに

対抗し得ないのではないか。ここに、カレツキ開発経済学の困難性がある。そしてそれは、カレツキ社会主義経済学の困難性でもある。

参考文献

- Arndt, H. W. [1985] "The Origins of Structuralism," *World Development*, 13 (2), February 1985, pp. 151-159.
- Dell, Sidney [1977] "Kalecki at the United Nations, 1946-54," *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 31-45.
- Eshag, Éprince [1977a] "Introduction to Michal Kalecki Memorial Lectures," *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 1-5.
- [1977b] "Kalecki's Political Economy: A Comparison with Keynes," *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 79-85.
- Feiwel, George R. [1970] "The Economics and Life of Michal Kalecki (1899-1970)," *Economia Internazionale*, 23 (4), Novembre 1979, pp. 241-277.
- [1975] *The Intellectual Capital of Michal Kalecki: A Study in Economic Theory and Policy*, Knoxville, The University of Tennessee Press, 1975, p. xxii, 583.
- FitzGerald, E. V. K. [1993] *The Macroeconomics of Development Finance: A Kaleckian Analysis of the Semi-Industrialized Economy*, New York, St. Martin's Press, 1993, p. xii, 222.
- Kalecki, Michał [1933] *Próba teorii koniunktury*, Warsaw, Instytut Badania Koniunktur Gospodarezych i Cen, 1933, p. 55.
- [1943] "Political Aspects of Full Employment," *Political Quarterly*, 14 (4), 1943, pp. 322-331.
- [1951] *Report of Main Current Economic Problems of Israel*, Tel-Aviv, Israel Government Printing Press, p. 23.
- [1954a] "El problema del financiamiento del desarrollo económico," *El Trimestre Económico*, 21 (4), October-December 1954, pp. 381-401.
- [1954b] *Theory of Economic Dynamics: An Essay on Cyclical and Long-Run Changes in Capitalist Economy*, London, George Allen and Unwin, 1954, p. 178. (宮崎義一・伊東光晴訳『経済変動の理論 資本主義経済における循環的及び長期的変動の研究』新評論, 1958年, vii, 254ページ)。
- [1960a] "Financial Problems of the Third Plan: Some Observations," *The Economic Weekly*, Bombay, 12 (28), July 9 1960, pp. 1119, 1121-1122.

- [1960b] "Unemployment in Underdeveloped Countries," *Indian Journal of Labour Economics*, 3 (2), July 1960, pp. 59-61.
- [1960c] *Hypothetical Outline of the Five-Year Plan 1961-1965 for the Cuban Economy*, Havana, Junta de Planificación y Estadística, December 1960, p. 45.
- [1962] "Outline of a Method of Constructing a Perspective Plan," in *Four Papers Prepared for International Conference to Be Held in Geneva 1963, Advanced Course of National Economic Planning, Teaching Materials*, Vol. viii, Warsaw, Szkoła Główna Planowania i Statystyki, 1962, pp. 1-15.
- [1963a] "Problems of Financing Economic Development in a Mixed Economy," in *Papers Presented at the UNESCO Seminar in Sao Paulo*, 30 Dec.-17 Jan. 1963, São Paulo, Faculty of Economics and Administration of the University of São Paulo, January 1963, pp. 37-50.
- [1963b] "The Difference between Perspective Planning in Socialist and Mixed Economies" in *Essays on Planning and Economic Development*, Vol. 1, Warsaw, Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1963, pp. 21-22.
- [1963c] *Zarys teorii wzrostu gospodarki socjalistycznej*, Warsaw, Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1963, p. 119. (竹浪祥一郎訳『社会主義経済成長論概要』日本評論社, 1965年, iv, 148ページ)。
- [1964] "Uwagi o społeczno-gospodarczych aspektach ustrojów pośrednich," *Prace i Materiały* (Międzyuczelniany Zakład Problemowy Gospodarki Krajów Słabo Rozwiniętych), 2 (4), 1964, pp. 55-61.
- [1966a] "Wysoko rozwinięta i zaoferana gospodarka kapitalistyczna (różnice w węzłowych problemach gospodarczych)," *Ekonomista*, 59 (5), 1966, pp. 971-977. (竹浪祥一郎訳「高度開発資本主義経済と後進資本主義経済」『経済セミナー』第131号, 1967年3月, 26-30ページ)。
- [1966b] "Ustroje pośrednie," *Polityka*, 10 (41), 1966, pp. 1, 8-9.
- [1968] "The Marxian Equations of Reproduction in Modern Economics," *Social Science Information*, 7 (6), 1968, pp. 73-79.
- [1970a] "Theories of Growth in Different Social Systems," *Scientia, Internationale de Synthèse Scientifique*, 105, May-June 1970, pp. 311-316.
- [1970b] "Problems of Financing Economic Development in a Mixed Economy" in *Induction, Growth and Trade: Essays in Honour of Sir Roy Harrod*, Eltis et al. (ed.), Oxford, Clarendon Press, 1970, pp. 91-104.
- [1976] *Essays on Developing Economies*, Hassocks, The Harvester Press,

1976, p. 208.

——— [1991] "Collected Works of Michal Kalecki" in *Capitalism: Economic Dynamics*, Vol. 2, ed. by Osiatyński, Jerzy, translated by Kisiel, Chester Adam, Oxford, Clarendon Press, 1991, p. xiv, 631

——— [1993] "Collected Works of Michal Kalecki" in *Developing Economies*, Vol. 5, ed. by Osiatyński, Jerzy, translated by Kisiel, Chester Adam, Oxford, Clarendon Press, 1993, p. xv, 264.

Kalecki, Michał & Kula, Marcin [1970] "Bolivia : un 'Régimen Intermedio' en América Latina," *Economía y Administración*, 16, 1970, pp. 75-78.

Kalecki, Michał & Sachs, Ignacy [1966] "Forms of Foreign Aid: An Economic Analysis," *Social Science Information*, 5 (1), March 1966, pp. 21-44.

Kowalik, Tadeusz [1966] "Biography of Michał Kalecki" in *Problems of Economic Dynamics and Planning: Essays in Honour of Michal Kalecki*, Warsaw, Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1966, pp. 1-12.

Lewis, W. Arthur [1954] "Economic Development with Unlimited Supplies of Labour," *The Manchester School of Economic and Social Studies*, 22 (2), May 1954, pp. 139-191.

Lim, Joseph Y. [1991] "A Kaleckian Three-Sector Model for Third World Countries," *Journal of Contemporary Asia*, 21 (1), 1991, pp. 3-12.

McFarlane, Bruce J. [1971] "Michal Kalecki's Economics: An Appreciation," *The Economic Record*, 47 (117), March 1971, pp. 93-105.

——— [1996] "Michal Kalecki and the Political Economy of the Third World" in *An Alternative Macroeconomic Theory: The Kaleckian Model and Post-Keynesian Economics*, King, John E. (ed.), Boston, Kluwer Academic Publishers, 1996, pp. 187-218.

根井雅弘 [1989] 『現代イギリス経済学の群像——正統から異端へ——』岩波書店, 1989年, vii, 282ページ。

大谷竜造 [1977] 「*The Intellectual Capital of Michal Kalecki* に寄せて」『経済研究』28 (4), 1977年10月, 355-359ページ。

Osiatyński, Jerzy [1988] *Michal Kalecki on a Socialist Economy*, London, Macmillan, 1988, p. x, 191. (岩田裕監訳『ポーランド改革の経済理論——カレツキの社会主義モデル』大月書店, 1990年, 248, 4ページ)。

——— [1991] Editorial Notes (with Annexes) to Kalecki [1991], pp. 477-615.

——— [1993] Editorial Notes (with Annexes) to Kalecki [1993], pp. 175-246.

Post, Ken & Wright, Phil [1978] "Some Comments on 'The "Intermediate Regime"

- and Industrialization Prospects'," *Development and Change*, 9, 1978, pp. 649-653.
- Robinson, Joan [1976] Introduction to Kalecki [1976], pp. 7-13.
- Sachs, Ignacy [1977] "Kalecki and Development Planning," *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 47-56.
- Sawyer, Malcolm C. [1985] *The Economics of Michał Kalecki*, London, Macmillan, 1985, p. x, 319.
- Skouras, Thanos [1978] "The 'Intermediate Regime' and Industrialization Prospects," *Development and Change*, 9, 1978, pp. 631-648.
- 都留重人 [1985] 『現代経済学の群像』岩波書店, 1985年, ii, 282ページ。